

しろちどり



第77号

2013年 9月 日本野鳥の会三重

http://www.geocities.jp/sirochidori_mie/

福島原発被災地は今…

津市 服部 公子

東日本大震災からわずか3か月の2011年6月、日本野鳥の会のスタッフは、放射性物質が野鳥に及ぼす影響を調査する目的で現地入りしました。あの想像を絶する混乱の中での調査活動は容易ではなかったはず。そんなスタッフに温かく接し協力を惜しまなかった人々…、彼らは巨大地震、大津波そして原発事故の被災者でした。今、彼らが一番恐れることは、被災地そして福島が全国の人々から忘れ去られてしまうのではないかと、ということです。

被災者の協力を得て調査を続けてきたスタッフは、被災地と被災者の現状を全国の会員に知ってほしいという熱い思いに駆られ、福島原発被災地を視るためのツアーを企画しました。野鳥の会上層部に、そんなツアーに参加する会員がいるのか？と反対されても熱意で押し通し、実現させた『福島原発被災地を訪ねるエコツアー』は、上層部の心配をよそに、あっという間に募集定員に達したそうです。

2013年7月4～6日2泊3日のスタートは東京駅、東北新幹線『やまびこ』で福島へ。福島駅からは貸し切りバス。このツアーに急きょ柳生会長が特別参加、初めての福島原発被災地入りとのこと。現地の協力者にあってお礼を言いたいし、八ヶ岳倶楽部に来てくれる福島からの避難者に心からかける『言葉』を見つけないかと。

このツアーにあつて一般のツアーに無いものは、放射性セシウムを計測する線量計、防護マスク、そして『公益一時立入車両通行許可書』。立入制限区域へ入るためスタッフが事前に許可を取ってくれたのです。

通行禁止の札のあるゲートを開けてバスを乗入れて進みます。そこには、あつたはずの住宅の基礎部分のみが夏草の中に見え隠れし、打ち上げられた船が無残な姿で横たわり、津波にもあそばされた車両がそこかしこに。ところどころに花や飲み物が置かれているのはご遺体が見つかった所です。

た。ここは、2年4か月前まで人々が穏やかに暮らし、農業や漁業で活気あふれていた場所なのです。

しろちどり 77号目次

福島原発被災地は今	1
表紙の言葉	1
絶滅した鳥類	5
事務局だより	7
訃報	7
中部ブロック会議	8
野鳥記録	9
探鳥会報告	12
編集後記	15

表紙の言葉

小坂里香

この時期になると、毎朝コンコンという軽快な音で目が覚める。

見なくてもわかる、ヤマガラが庭のエゴの木の実をついばみ、

器用に果皮を剥いて、種をつついて音。

夏の終わり、しばらくの間この可愛いお客の来訪を楽しめるのは、

それを見越してエゴノキを植えたからね、と自画自賛してみる。

入れ替わり立ち代わりやってくる愛くるしいヤマガラの旺盛な

食欲に、鈴なりのエゴの実も、あっという間になくなるはず。

今年はずっとお客さんが少ないんでないの、と心配しつつ、

目を細めて見守る毎日なのであります。



タシギ：尾羽

現地を案内し話を聞かせてくれたのは、被災者でありながら地域の絆を取り戻そうと活動している人、大津波のさなか身内を亡くしながらも仲間の安否を確かめようと漁船を操った船長、九死に一生を得た強さで仲間のために国や東電との厳しい交渉に臨む漁協職員、昼間だけ立入を許された地域で放射能汚染を恐れず復興に取り組む人、過酷な生活環境に置かれた仮設住宅に暮らす避難者をまとめ行政との橋渡しに奔走する自治会長等。言い表すこともできないほどの辛苦と恐怖を経験しながらも前向きに力強く生きる方々でした。

原発事故後に全住民の避難を余儀なくされた浪江町、その中でも津波の被害の大きかった請戸地区に入りました。この辺りはおよそ 100 年前の大規模な干拓事業で埋め立てられた土地で、まっすぐな道路を挟んで住宅が整然とならび、その周辺に田畑が広がっていたところです。今は大きくひび割れた道路沿いに、打ち上げられた漁船、車、そして瓦礫の山が続くだけです。大津波の後に地盤沈下でできた新たな湿地には、カルガモに交じて一羽のコハクチョウが…。怪我でもして北へ帰ることができなかったものか、飛び去る様子は見せませんでした。



請戸小学校跡

請戸小学校跡地に入りました。正面玄関横の大きなモニュメントの上部に取り付け

られた大時計は、大津波に襲われた 3 時 40 分で止まっていました。校内のすべての時計が同じ時間で止まっています。被害の大きさを物語る小学校の建屋は、その後に入り込んだネズミの糞尿でひどく汚れ、かじられた後も見られます。そんな校内の 2 階、教室の後ろの棚には子供たちのカバンや厚手の上着が並んでいました。救援に入った隊員たちが瓦礫の中から見つけ出しては泥を落として片付けたものでしょうか。黒板には、卒業生が書いたと思われる悔しさのにじむメッセージ、全国から派遣された自衛官や警察官、消防隊員の励ましと復興への決意のメッセージがそのまま残されていました。これは当時のニュース映像で見られた方も多いと思います。



請戸小学校の時計

一部地域に残された車や船の残骸が一樣に焼け焦げた色をしていました。油火災のあった地域か？と思いましたが違いました。ぬかるむ足元に注意しながら近づくと、それは錆びた鉄くずにふじつぼがビッシリ付いているものでした。元々海を埋め立ててできた土地の中でも特に低い地域であったため、津波の水がなかなか引かず今でも満潮時は海水に浸かるので、まるで海底の沈没船のような無残な姿になってしまったものです。目の前の光景は、2 年 4 か月前までそこに暮らす人と共にあったはずの船や車、トラクターなどが、何十年も海の底にあったがごとき姿で現れたかのようなのでした。

相馬野馬追を数日後に迎える小高神社に寄りました。南相馬市小高区の小さな神社ですが、3日間の野馬追の最終日に行われる野馬懸神事の舞台となるところです。人があまり入らない社殿裏の林の中は、社殿前とは比較にならないほどの放射線量で、線量計は計測不能を示す『9999』を表示していました。

小高地区の北隣原町区は、今回のツアーへの最大の協力者が活動する地域です。未曾有の大災害に加えての原発事故で絶望的な状況の中で、彼とその仲間のグループは地域復活のために何をすべきかを考えたそうです。思い至ったのが津波の難を逃れた『花見山』、ここは春・夏・秋の祭りのときや季節の節目に地域の人々が集う憩いの場所でした。地域の人々の絆を取り戻すために、ここを地域復興の拠点にしよう！と。被災後荒れ果てたこの場所の整備に彼らは着手しました。山の入り口に手作りの風呂や休憩所を作り、倒れた木や草を取り除き、古い枕木を利用して遊歩道を作ったのです。

案内された遊歩道の先に、立ち入り禁止のゲートが置かれ、その向こうの崖下は土がむき出しになりコンクリートの擁壁が作られていました。そこは瓦礫の仮置き場として整備されつつあったところ。ところが、花見山を地域復興の拠点にしようとグルー

プががんばっていることを知った市が、仮置き場の整備を断念し工事を中止したとのことでした。お世辞にも若いとは言えないこのグループの人達が、いち早く除染作業を請け負っただけでなく、自主的に地域復活に取り組む活動を進めていたことを知り、立場こそ違えど復興行政に携わる職員たちを大いに勇気づけたことでしょう。

飯館村へ続く道路わきの田畑だった所には、厚手の作業着と防護マスクに身を固め除染に取り組む作業員の姿を見かけました。しかし、この地域の豊かな森林は放射能に汚染されたままです。人里を囲む森林が除染されない限り、避難させられた住民が戻って暮らすことはできません。全村避難にあたってテレビは、全住民揃って戻ろう、と強く語る村長の姿を映し出していましたが、直近の村民アンケートでは、飯館村に帰ると答えた人は三分の一にまで減ってしまったとのこと。多くの住民が帰りたくても諦めざるを得ないと感じ始めているのです。

田舎暮らしに憧れて都会から移り住む人たちが増えていたという飯館村。原発事故の日はその季節には珍しく東南の風、その風に運ばれた放射性物質は、その夜の大雪で福島第一原発から北西に40キロも離れた飯館村に落ち、飯館村は全村避難を余儀なくされました。



クズ

そんな飯館村は今もまだ放射線量が高く、道路を歩くときも舗装されていない道端には寄らないように言われました。側溝や草むらでは舗装部分の10倍を超える放射線量があります。マスクを着用するように指示されたのですが、この日はとても暑く多くの参加者が首にぶら下げていました。昼間だけ滞在が許されて毎日仮設から通っているご夫妻に、コーヒーと冷たい水を振る舞っていただきながら話を聞きました。「作物を作っても売ることはいから、いろいろ考えて花ならいいんじゃないかと思いついた、これから花を栽培して売ってよ、買ってくれる？」と、こんな現状にもめげず冗談まじりに語ります。彼の後方に見える真新しいログハウスは、都会から移り住む直前の被災で、楽しみにしていた飯館村移住がかなわなかった人の住宅でした。



ツバメ

飯館村の町中はツバメがとても多いと評判の場所でした。昨年調査に入ったときには一羽も見なかった、と説明しているスタッフの頭上に突然ツバメが現れてスタッフもびっくり。今年になって昼間だけ滞在を許された住民が、片付けなどで家に入出入りするようになったからか、戻ってきたツバメがいたのです。このときはわずか10羽足らずでしたが、ツバメが乱れ飛ぶ元の街の姿を早く取り戻してほしい、と願いました。

移動の車窓から見える耕作放棄（させられた）地で見られる鳥はノスリでした。通常は夏場にはめったに見えないそうですが、電柱や木の上にとまっているもの、餌を探して飛び回るものなど、次々現れます。人がいなくなってネズミが大繁殖したため餌に事欠かなくなったからとのこと。しかし、放射性物質を体にため込んだ餌をたっぷり食べたノスリにこの先どんな変化が現れるのか？気がかりなことです。

原発事故で大量の放射能が陸に海にまき散らされました。原子炉本体の爆発が起きれば、国土の半分近くが失われるという最悪の事態を、あの3月11日の直後から東電第一原発に留まり、文字通り命がけで戦って防いだ技術者たちもそのほとんどが福島の人達でした。彼らも故郷を失ったのです。私たちが不自由なく暮らしている今も、福島は苦しんでいます。

原発被災地周辺の農業者、漁業者は作る作物も獲る魚介類も制限される中で、懸命に生産活動を再開しています。しかし、せっかく取れたものも福島産というだけで市場では他の地域の半値から三分の一の値段しかつきません。おまけにその都度、放射性物質の量を測定しなければならないため、それにかかる手間と生産物を無駄にしているのです。検査の結果、放射性物質が検出されないにもかかわらずまともな値段がつかない、まさしく風評被害です。語る彼らの表情に悔しさが滲みます。

私は、この目で見た被災地の現状と、身内を亡くし、家を流され、故郷を追われた被災者の方々の声と、それでも必死に前向きに復興に取り組む人々を忘れることはできません。若くもなく体力もない私ですが、スーパーや通販で福島産の物を見つけて購入することならできます。そんなささやかな行動でも福島の被災者を勇気づけ、少しは福島の力になることができると信じているからです。

みなさんも、どうか福島の原発被災地を忘れないでください。そして被災地支援につながる『何か』をみつけ実践してほしいと切に願っています。

絶滅した鳥類

津市 平井正志

野生動物の絶滅に人類は残念ながら深くかかわっている。マンモスの絶滅はヒトによる狩りが主な原因ではないかと想定されている。人類はアフリカで進化を遂げ、その後、中東を経て、一部はヨーロッパへまた他方はアジア、オーストラリアへ分布を広げた。その後シベリアを北上し、当時陸続きであったベーリング海峡を渡り、アメリカ大陸へ分布を広げ、瞬く間に南端フエゴ島まで達した。このアメリカ大陸へ人類が到達した後、多くの野生動物が絶滅している。また、航海技術の発達により、離島へも到達可能になった。島に住む鳥も絶滅したものが多い。いくつかの例を示してみよう。

1. リョコウバト (Passenger pigeon)

(*Ectopistes migratorius*)

アメリカ大陸に大量に生息していた体長40cmの大型のハト。赤褐色の胸と石板色の背が美しく、尾と翼が長い。個体数は極めて多く、50億羽であったとも推定される。そのため、渡りの集団はすさまじく、数日間途切れることなく、空を多いつくすような巨大な集団で渡った。



リョコウバト

ヨーロッパ人がアメリカ大陸へ移住してから、食料として乱獲された。農業開発による森林の減少も大きな打撃になったはず。大陸横断鉄道が開通すると猟銃で撃ち落とされ、塩漬け肉として貨車で東部へ輸送され、消費された。1850年頃より、減少が目立つようになり、1907年カナダのケベックで打ち落とされたのが野生最後の個体である。動物園で飼育されていた個体は1914年に死亡し、絶滅した。

エスキモーコシャクシギ *Eskimo Curlew (Numenius borealis)*

この鳥は日本でも稀に見られるコシャクシギ (*Numenius minutus*) と近縁あるいは同種の可能性もある。ラブラドル半島などカナダ北部で繁殖し、アメリカ大陸を縦断して渡り、ウルグアイ、アルゼンチン、パタゴニアなど南アメリカで越冬していた。春にはメキシコ湾沿岸を東へ移動し、ミシシッピ川に沿って北上した。1850年代まで膨大な数が渡っていたという。おそらくアメリカ大陸で最も数多いシギであったろう。大勢のハンターが集まり、猟銃で狙った。一発で数羽が落ちたというくらい密な群を作って渡っていたようだ。撃ち落とされたシギは列車で東海岸へ運ばれた。1年に200万羽が撃ち落とされたともいう。運びきれないシギはその場に捨てられ、腐るにまかせたという。



エスキモーコシャクシギ

1875年には減少が顕著になり、1883年には既にいくつかの場所で姿を消してしまった。ごく短期間に激減した。20世紀に入ってからには散発的な目撃例しかない。おそらく、現在は絶滅したものと考えられている。

このシギは東アジアを通過するコシヤクシギと非常によく似ている。コシヤクシギより、わずかに大きく、黄褐色味が強く、翼が長く、たたんだ時に尾よりも初列が突出する。しかし、野外での識別が極めて困難であろう。コシヤクシギはアメリカ大陸を通過しないが、迷行したばあい、識別は容易ではないであろう。近年もエスキモーコシヤクシギであるとの画像が見受けられるが、確証的なものはない。

2. モア Moa

ニュージーランドに棲息していた巨大な鳥。飛ぶことはできない。少なくとも9種いたと推定される。そのうちの一種、ジャイアントモアは200 kg。背丈3 mから3.6 mであり、地球上に生息した最大の鳥と考えられている。無人島であったニュージーランドへマオリ族は9世紀頃に進出した。その後マオリ族により捕獲されるようになった。ニュージーランドへは1642年にヨーロッパ人が到達、1769年イギリス人航海士J. クックが再発見するが、1770年頃絶滅したと考えられる。今でも多くの骨が発掘されている。

3. ドゥードゥー Dodo

インド洋上のマダガスカル島から800キロほど離れたマスカリン諸島、すなわちモーリシャス島、レユニオン島、ロドリゲス島の三島に棲息していたハトと近縁な鳥。

重さ10-22kgという巨漢、巨大な頭と巨大な嘴をもつ。植物食で飛ぶことはできない。ハトに近縁であるとされている。1598年オランダ船がモーリシャスに到着した。おそらく数世紀前からアラブ人が到着していたが、アラブ人による記載はない。ヨーロッパ人が到着してから、彼らに食料として捕獲され始める。1681年に

絶滅した。

4. カンムリツクシガモ Crested Shelduck (*Tadorna cristata*)

江戸時代の書物、観文禽譜の絵にチョウセンオシとして記録されている。江戸時代でも日本では稀であったと思われる。3標本のみ残されている。第1標本は、1877年ウラジオストクで採集されたメスで現在コペンハーゲン博物館にある。第2標本もメス本剥製で命名者黒田長禮が1917年朝鮮の標本商で発見購入し、新種として記載した(鳥1(5)、1917)。釜山付近で1916年12月採集されたものという。第3標本は唯一のオスで1913か1914年初冬に群山付近で採集した2羽のうちの1体で黒田長禮が取得した。第2・第3標本は山階鳥類研究所が所蔵している。1964年5月16日ウラジオストク付近で3羽目撃されたのが最後である。中国東北部、ロシアウスリー地方、朝鮮半島など極東の一部にのみに棲息していた。北海道に来ていた可能性もある。ツクシガモとアカツクシガモに近縁であろう。なぜ絶滅したのかわからない。もともと生息数は多くなかったであろう。まだ生存している可能性もわずかにある。剥製標本は日本にあるため、見る機会があるかもしれない。



ドゥードゥー

事務局だより

活動記録（2013年5月～9月）

- 5/12 会計監査
- 5/26 2013年度総会・中部ブロック会議第1回実行委員会
- 6/20 会報「しろちどり第76号」発行
- 6/27 「木曾岬干拓地問題」で木曾岬町長に面会
- 7/11 丸紅にメガソーラー開発計画の詳細を聞く
- 7/28～29 四日市市の東産業（株）主催の環境フェアに出展参加
- 7/29 中部ブロック会議準備会
- 8/25 中部ブロック会議第2回実行委員会
- 9/7～8 中部ブロック会議
- 9/9 国土交通省による護岸工事のため環境調査を委託している大日本コンサルタント（株）と面会（聞き取り調査）
- 9/13 国土交通省榑田川出張所に出向き、榑田川護岸林および中州の樹木伐採について詳細計画を聞く

今後の予定

- 9 会報「しろちどり第77号」発行
- 10/ 国土交通省企画のクリーン大作戦に参加予定
- 10/26～27 三重しぜん文化祭 in くわな出展予定

訃報

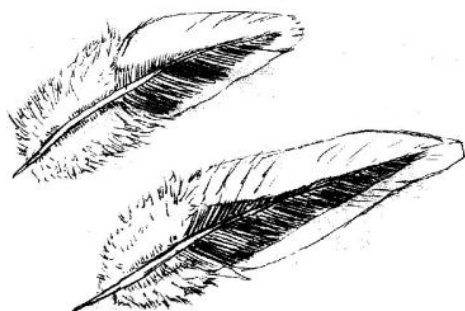
市川雄二 元副支部長（当時）が、7月11日夕刻入院先の病院で逝去されました。

70才でした。市川さんは、日本野鳥の会三重の前身である三重野鳥の会からの会員で、長年、会の運営に携わりながら、野鳥に関する様々な調査や保護、啓発活動に尽力されました。

最近では、県のレッドデータ改編のための委員を務めるなど精力的でした。また、海外にもよく出かけられ、数多くの南国の野鳥を写真や映像にまとめられ、企画展などで披露されました。

事務局として、市川さんには調査をはじめ様々なお願いをしてきましたが、その都度、快諾してくださいました。いつも穏やかで微笑まれている印象があり、訃報が届くまでご病気だとは全く存じませんでした。いま思うと、ご自身の病気のことを話されなかったのは、周囲に対する優しい心遣いだったのかもしれない。謹んでお悔やみ申し上げます。

（事務局：西村）



アオバト：下尾筒

中部ブロック会議

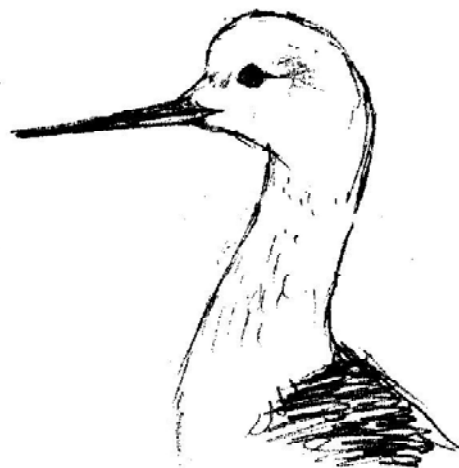
第21回日本野鳥の会中部ブロック会議が、2013年9月7日、8日津市プラザ洞津で開催されました。中部ブロック会議は中部各県の野鳥の会連携団体、支部が1年に一度集まる会議です。今回は中部ブロック10県、全20団体のうち15団体が参加しました。なお、新潟、長野、静岡には県内に複数の野鳥の会連携団体が存在するので県の数より団体数は多くなります。他県および本部財団からの参加者は33名、それに加え、本会から32名の会員が参加あるいは会議運営のサポートにあたりました。

会議初日、7日、福井県支部からあわら風力発電の問題について、長野支部からは野鳥撮影マナーについて、諏訪からはクマタカの高圧電線感電事故とその対策について、富士山麓支部からは富士五湖で定着したカナダガンの捕獲について、が報告されました。また、愛知県支部からは会員をどのようにして増やすかとの問題提起がされ、いくつかの意見が出されました。さらに、財団本部と東京、神奈川などで共同して探鳥会を行い、新しい会員を増やす試みが紹介されました。

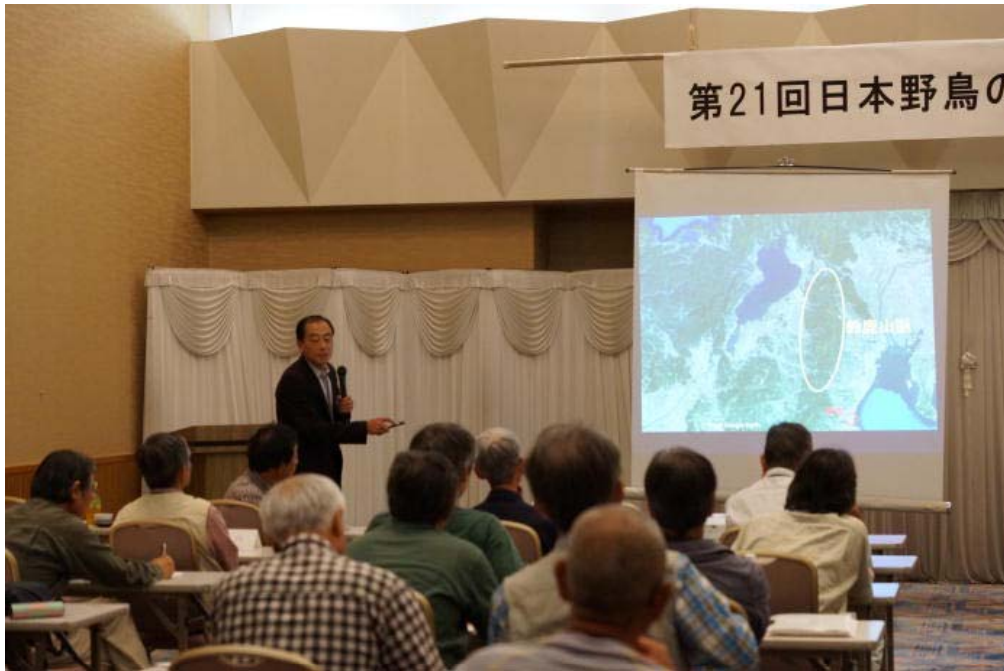
その後滋賀県在住の猛禽類研究家、山崎亨氏による「鈴鹿山脈のイヌワシ・クマタカと森林文化」と題して講演がありました。氏の鈴鹿山脈においての長年に渡る研究の成果、イヌワシ・クマタカの詳しい生態が具体的な数字を示して説明されました。夕食をはさんで、野鳥の会三重の今井光昌氏によってセイタカシギの繁殖とヒナの成鳥についての詳細な観察がスライドを用いて報告され、好評でした。

翌日8日はあいにく雨模様の天気でしたが、2班に分かれ、香良洲海岸と五主曾原大池で探鳥しました。香良洲海岸ではメダイチドリ、チュウシャクシギ、ミユビシギなど種々のシギ・チドリを、また、曾原大池ではセイタカシギの集団とオグロシギを観察しました。セイタカシギは成鳥と幼鳥の混じった家族と思われる集団で、両者の区別がはっきりと分かりました。内陸県や日本海岸の県からの参加者にとってはシギ・チドリを身近に見ることが少なく、有意義な探鳥となりました。来年、2014年は静岡県の担当で、6月7、8日駿東郡小山町須走で日本野鳥の会創始者、中西悟堂にちなんだ会議の開催を予定しているとのことです。

この会議には野鳥の会三重から大勢の会員が参加し運営に協力していただきました。参加した当会会員の方々には他県の会員との絶好の交流の場になったと思います。ご協力に感謝いたします。(平井：記)



セイタカシギ



山崎 亨氏の講演-

野鳥記録 (2013年5月11日から9月5日までに報告があったもの)

野鳥の種類名	個体数	観察年月日	観察場所 (三重県)	雄/雌/などの区別	記録報告者名	脚注
フクロウ	2	2013年5月24日	三重郡菰野町菰野	幼鳥	矢田 栄史	1
ホトトギス	1	2013年5月17日	四日市市西坂部	成鳥 雄	安藤 宣朗	2
メボソムシクイ	1	2013年6月8日	桑名市福岡町	不明	斉藤 丈士	3
ツバメチドリ	7羽	2013年7月28日	松阪市五主町地内	不明	前田 聡	4
センダイムシクイ	5~6	2013年8月28日	菰野町三重県民の森	不明	矢田 栄史	5
コサメビタキ	1	2013年8月28日	菰野町三重県民の森	不明	矢田 栄史	6
キビタキ	1	2013年8月28日	菰野町三重県民の森	雄	矢田 栄史	7
マダラシロハラ ミズナギドリ	1	2011年6月8日	津市白塚町	不明	宮越和美	8

注 ;

- 1) 桜の木にとまっていた、素早く撮影してすぐに退散したが低い声で威嚇?してきた
- 2) 今季初めての観察 飛びながら独特の囀りを聴く
- 3) 道路脇の木にいました
- 4) 7月28日に今期初見であり、豆が蒔かれた田圃に佇む数羽のツバメチドリを発見、幼鳥が多数
- 5) せまい範囲を数羽がとびかい、さかんに採餌していた
- 6) センダイムシクイと同じところに1羽だけとまっていた8月にこの鳥を見るのは初めて

7) ♂がキビタキ♀?かもしれない個体をおいかけまわしていた

8) 死体取得。標本として大阪府立自然史博物館へ収蔵、国内では 1986 年に広島県で初記録以来 2 例目の記録。宮越ほか「三重県津市町屋浜海岸で得られたマダラシロハラミズナギドリ」,日本鳥学会誌 63 (印刷中)

マダラシロハラミズナギドリ Mottled Petrel (*Pterodroma inexpectata*) はニュージーランドや周辺の離島で繁殖し、繁殖を終えると赤道を越え、非繁殖期はベーリング海、アラスカ湾などで過ごす。アメリカ西海岸、ガラパゴス諸島でも記録がある。翼開長 85 cm 全長 34 cm。主な食べ物はイカや魚類、外洋性であり、繁殖期以外は陸には近づかない。
(編集部)



センダイムシクイ (矢田栄史)

メボソムシクイ (斉藤丈士)



コサメビタキ (矢田 栄史)



ツバメチドリ (前田 聡)

会報「しろちどり」への投稿歓迎

会報は会員の原稿によって作られています。野鳥に関することはどしどし投稿ください。鳥見の記録、感想文、写真、絵なんでも結構です。別に珍しい鳥に限ることはありません。どうせ、珍しい鳥にはめったに会えないのですから。また、鳥の行動などについての観察、疑問でも結構です。特に初心者の方々の投稿が少ないので歓迎します。県外へ鳥見に行った記録、登山、ハイキング、散歩中に見た、聞いた鳥について、なども歓迎です。

E-mail では mhirai@kpu.ac.jp まで、

郵送は 514-2325 三重県津市安濃町田端上野 910 - 49 平井正志 宛にお願いします。

探鳥会報告

(2013年5月～2013年7月)

● 上野森林公園探鳥会

2013年5月5日(日) 10:00～12:00

伊賀市 上野森林公園

共催団体/上野森林公園・三重県環境学習情報センター

前澤昭彦 木村京子(県環境学習情報センター) 参加者29名(会員4名)

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、トビ、キジバト、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、コシアカツバメ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス、オオヨシキリ、ムシクイ(sp)、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コジュケイ 計31種

三団体の共催で実施した探鳥会でした。各団体がPRした成果で参加者が30名ほどになった。京都府や四日市、松阪から多くの参加者があり盛況となった。

鳥は冬のカモが居残っていてゆっくりと観察できた。渡りの途中のキビタキ、オオルリを目標にしたが観察されなかった。計31種の中にコムクドリがリストに入ったのはよかった。

● 鈴鹿川派川探鳥会

2013年5月6日(月・祝)9:20～11:15

四日市市楠町南五味塚 鈴鹿川派川河口

安藤宣朗 参加者12名(会員10名)

カワウ、ダイサギ、チュウサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、シロチドリ、メダイチドリ、キョウジョシギ、トウネン、ハマシギ、キアシシギ、イソシギ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、ミユビシギ、コアジサシ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス 計24種

ゴールデンウィーク最終日、快晴に恵まれ絶好の探鳥会となった。この場所での探鳥会は久しぶりなので参加者が集まるか心配したが、滋賀県からの参加者も含めて12

名の参加を得て楽しい観察会が出来た。

シギ・チドリの渡りは、今がたけなわ・
・キョウジョシギ・メダイチドリ・チュウシャクシギ・トウネンやオオソリハシシギなど10種類のシギ・チドリを観察、中でもミユビシギが群れ飛ぶ光景は圧巻であった。その他コガモ・コアジサシなど14種類を観察し合計24種類を見ることができた。

● 朝明源流探鳥会

2013年5月12日(日)9:00～15:00

三重郡菰野町 朝明溪谷

辻 秀之 参加者7名(会員4名)

トビ、ツツドリ、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、オオルリ、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、イカル、カケス、ハシボソガラス、コジュケイ 計21種

ぶな清水への登山道は近年よく整備されて歩きやすい。道中オオルリ、キビタキ、ヤブサメなどのさえずり、イワカガミやシロヤシオの花を楽しみながらゆっくり歩いた。

ぶな清水では1時間以上の大休止とし、アカゲラと思われる巣穴などを観察した。



オオルリ

● 海蔵川探鳥会

2013年5月14日(火)9:45～12:00

四日市市西坂部町 海蔵川沿い

川瀬 裕之 参加者16名(会員13名)

しろちどり 77号(2013)

カイツブリ、カワウ、カルガモ、オオタカ、イカルチドリ、ケリ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 計20種

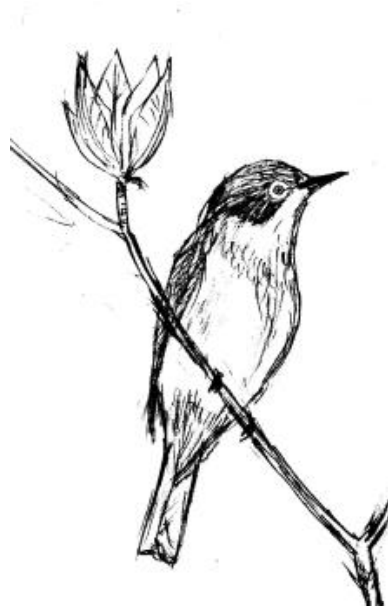
素晴らしい五月晴れに恵まれた今年度最初の探鳥会でした。

天気が良すぎて気温が高いためか鳥の出だしを心配しましたが、海蔵川の定番になってきましたカイツブリが可愛らしい声で出迎えてくれました。カワセミも負けじと対岸の木に一か所に二羽が結構長い時間止まってサービスしてくれました。また田んぼで獲物をハンティングしたオオタカが飛び立つのを目の当たりに出来てちょっと興奮しました。サギ類が見られなかったのがやや残念でした。

鳥合わせが終わったあと、会員の方が作っていただいたシフォンケーキを皆でおいしくいただきました。

● 県民の森探鳥会

2013年5月19日(日) 10:00～12:10
三重郡菰野町 三重県民の森
矢田栄史 尾畑玲子 参加者13名(会員5名)



メジロ

アオサギ、トビ、タカ SP、キジバト、ホトトギス、ヒバリ、ツバメ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、キビタキ、エナガ、メジロ、ホオジロ、イカル、スズメ、ハシボソガラス 計17種

当初予定していた市川リーダーが都合がつかなくなったため、代役が案内しました。予報よりはるかに好ましい天気めぐまれ、滴るような緑の中をゆっくり散策する事ができました。

野鳥の種類や数はやや少なめでしたが、トゲアリやセンチコガネなど昆虫の観察もできました。かおりの広場ではいつもなにかしら歩みを留めるものが見られますが今回も、エナガの仲間同士のおしゃべりが木立の上から降るように聞こえてきました。ホトトギスの声が森の外から絶えず聞こえてきました。トビは3羽同時にみられ、それとは別に上空でタカが飛びましたが同定にはいたりませんでした。

● 瀬戸林道 山の鳥探鳥会

2013年5月25日(土) 9:30～11:30
津市美里町 瀬戸林道
平井正志 服部公子 参加者15名(会員12名)

ホトトギス、クマタカ、アカショウビン、コゲラ、アオゲラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ミソサザイ、カワガラス、オオルリ、キセキレイ 計12種

新緑も過ぎ、緑一色の谷筋であった。最初はオオルリの声も聞かれず、ミソサザイも鳴かず今日は鳥が少ないと話していた。堰堤上の流れでは尾の短いキセキレイの幼鳥が飛び回り、親鳥がしきりに鳴いて警戒していた。林道を少し登った所で、突然、ヒロヒロヒロロロロロロ、アカショウビンの声、一同びっくり、姿を探すがスギ林の中で見えない。結局参加者のひとりが飛ぶ姿をちらっと見ただけだった。しかし、オオルリのさえずりも近くで聞かれ、最後に姿が見え、一同オオルリの姿と、アカショウビンの声に満足。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2013年5月26日(日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地
共催団体/日本野鳥の会愛知県支部

米倉 静 参加者12名(会員2名)

キジ(2)、マガモ(1)、カルガモ(31)、スズガモ(1)、キジバト(4)、カワウ(60)、アオサギ(6)、ダイサギ(4)、ケリ(30)、コチドリ(3)、コアジサシ(2)、ミサゴ(1)、チュウヒ(2)、オオタカ(2)、ハヤブサ(1)、ハシボソガラス(10)、ハシブトガラス(70)、ヒバリ(15)、ツバメ(30)、ウグイス(8)、メジロ(1)、オオヨシキリ(4)、セッカ(20)、ムクドリ(6)、スズメ(40)、ハクセキレイ(1)、カワラヒワ(1)、ドバト(3) 計28種

気持良い風の吹く中園の林にオオタカが入る。ラジオ塔にはハヤブサの若、近くをチュウヒが飛ぶ。木曾岬では陽炎の中チュウヒ・オオタカが出る。カルガモ9羽が恐る恐るオオタカにモピング?するも気にせずソアリングしている。



ミサゴ

● 安濃ダム探鳥会

2013年6月9日(日) 9:30～11:30

津市芸濃町河内 安濃ダム周辺

落合 修 岡 八智子 参加者23名(会員17名)

キジバト、ホトトギス、ハシボソガラス、

ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、キセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、コジュケイ 計15種

喝水のため、安濃ダムの水が干上がっており、水がない状況での探鳥会でした。上流の川も水が少なく期待されていた鳥は出ませんでした。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2013年6月23日(日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地
共催団体/日本野鳥の会愛知県支部

近藤義孝 米倉 静 参加者14名(会員5名)

キジ(7)、カルガモ(13)、スズガモ(1)、キジバト(3)、カワウ(50)、アオサギ(5)、ダイサギ(5)、ケリ(20)、コチドリ(2)、ミサゴ(3)、チュウヒ(1)、モズ(1)、ハシボソガラス(10)、ハシブトガラス(20)、ヒバリ(20)、ツバメ(20)、ヒヨドリ(1)、ウグイス(1)、オオヨシキリ(1)、セッカ(3)、ムクドリ(16)、スズメ(50)、ハクセキレイ(2)、カワラヒワ(8)、ホオジロ(3)、ドバト(15) 計26種

梅雨の晴れ間、天気はよかったです、鳥の種類はあまり出ませんでした。ただ、チュウヒの餌運びが観察できました。鍋田干拓地と木曾岬干拓地の堤防に生えているビワが食べられずにたわわに実っていたのはびっくりしました。鳥が運んできた種子が発芽して成長したようです。

● 室内探鳥会

2013年6月30日(日) 13:30～16:30

伊勢市八日市場町 伊勢市立図書館

中西 章 西村 泉 参加者11名(会員11名)

梅雨時で、しかも鳥の少ない時期ということで、初めて室内探鳥会を試みました。探鳥会と称しておりますが、親睦会的な意味を込めての試みでした。11名の会員さんが集まって下さり、日ごろの鳥にまつわる話や観察記録の報告、野鳥写真の発表、また鳥の起源の発表など、それぞれの会員さんが関心のある題材を持ち寄っていただ

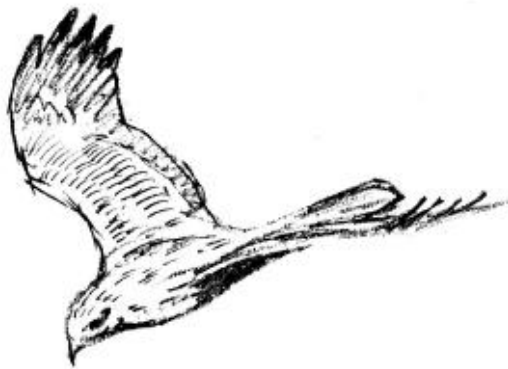
きました。野外の探鳥会ではあまりできない質問や意見など、有意義な鳥談義の時間でした。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2013年7月28日(日)9:00～12:00
愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地
共催団体/日本野鳥の会愛知県支部
近藤義孝 米倉 静 参加者15名(会員5名)

キジ(4)、カルガモ(23)、ハシビロガモ(1)、
キジバト(4)、カワウ(60)、アオサギ(5)、
ダイサギ(5)、コチドリ(1)、クサシギ(2)、
イソシギ(3)、ミサゴ(3)、トビ(1)、チュウ
ヒ(2)、ハシボソガラス(5)、ハシブトガラ
ス(70)、ヒバリ(10)、ツバメ(300)、ヒヨドリ
(2)、ウグイス(1)、セッカ(5)、ムクドリ
(60)、スズメ(30)、ハクセキレイ(3)、カワ
ラヒワ(7)、ホオジロ(2)、ドバト(15) 計
26種

木曾岬干拓地では、4年ぶりに巣立った
チュウヒの若鳥を観察できました。盛夏と
いっても、風が吹いていたので堤防の上で
は何とか観察を続けることができました。



チュウヒ

編集後記

先日久しぶりに曾原大池に行った。セイ
タカシギの家族だろう。幼鳥と成鳥の十数
羽の群が羽を休めていた。池は以前と変わ
りない。しかし、その向こうの葦原が埋め
立てられた。聞くところによるとソーラー
パネルを設置する予定とのこと。やれやれ、

この葦原は大きくは無いものの、毎年チュ
ウヒが飛来し、採餌する。また、カモ類の
隠れ家でもあった。夏にはむろんオオヨシ
キリが繁殖していた。おそらく冬にはオオ
ジュリンやメジロなどもいたことだろう。
曾原大池周辺一帯は干潟があり、淡水の水
面があり、葦原があり、水田があり、多様
な環境があつて、それぞれの鳥が使い分け、
多様な鳥類の棲息を可能にしてきた。生物
多様性の見本のような場所である。その一
つがなくなった。はたして、ソーラーパネ
ルにこのような自然の多様性をなくするだ
けの価値があるのだろうか？

もし、現在の電力量の20%を自然エネ
ルギーでまかなおうとするとソーラーパネ
ルだけでも膨大な面積のいわゆる遊休地を
消滅させなければならないだろう。おそら
く、そのほとんどが芦原であり、草原であ
り、休耕田であり、生物の多様性を保持し
てきた場所であろう。とても現在の政府の
政策がそれを見越して、かつ、多様性が失
われた場合どうなるかを想定したものとは思
えない。

身近な自然が徐々に蝕まれてゆく。

(M.H.)

しろちどり 77号

2013年9月20日発行

題字：濱田 稔

表紙絵：小坂里香

カット：平井正志

編集：平井正志

発行所：日本野鳥の会三重

平井正志方

514-2325 津市安濃町田端上野910-49

http://www.geocities.jp/sirochidori_mie/

印刷：伊藤印刷株式会社

514-0027 三重県津市大門32-13

